

2020. 8. 23 (日) マタイ22:1~14

- 22:1 イエスは彼らに対し、再びたとえをもって話された。
- 22:2 「天の御国は、自分の息子のために、結婚の披露宴を催した王にたとえることができます。
- 22:3 王は披露宴に招待した客を呼びにしもべたちを遣わしたが、彼らは来ようとしなかった。
- 22:4 それで再び、次のように言って別のしもべたちを遣わした。『招待した客にこう言いなさい。「私は食事を用意しました。私の雄牛や肥えた家畜を屠り、何もかも整いました。どうぞ披露宴においでください」と。』
- 22:5 ところが彼らは気にもかけず、ある者は自分の畑に、別の者は自分の商売に出て行き、
- 22:6 残りの者たちは、王のしもべたちを捕まえて侮辱し、殺してしまった。
- 22:7 王は怒って軍隊を送り、その人殺しどもを滅ぼして、彼らの町を焼き払った。
- 22:8 それから王はしもべたちに言った。『披露宴の用意はできているが、招待した人たちはふさわしくなかった。
- 22:9 だから大通りに行って、出会った人をみな披露宴に招きなさい。』
- 22:10 しもべたちは通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った人をみな集めたので、披露宴は客でいっぱいになった。
- 22:11 王が客たちを見ようとして入って来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない人が一人いた。
- 22:12 王はその人に言った。『友よ。どうして婚礼の礼服を着ないで、ここに入って来たのか。』しかし、彼は黙っていた。
- 22:13 そこで、王は召使いたちに言った。『この男の手足を縛って、外の暗闇に放り出せ。この男はそこで泣いて歯ぎしりすることになる。』
- 22:14 招かれる人は多いが、選ばれる人は少ないのです。」

<説教>

「イエスは彼らに対し、再びたとえをもって話され」ます。(22:1)

「彼ら」とはユダヤ人の「祭司長たちとパリサイ人たち」(21:45)であり、「祭司長たちや民の長老たち」(21:23)です。

そしてそこには「彼ら」のほか、彼らが恐れたユダヤ人の「群衆」(21:46)もいました(イエスの弟子たちもいました)。

場所はユダヤの中心都市エルサレムの神殿(「宮」)です。

その宮に入る途中でイエスは、葉が茂っていただけで実のなかったいちじくの木に対して、「今後いつまでも、おまえの実はならないように」と言われ、木は枯れました。

それは、見た目は立派だが神がお求めになる信仰がないユダヤ人の宗教と儀式に対する神のさばきの宣告であり警告でした。

そしてイエスが宮に入って教えておられると、祭司長たちや民の長老たちが来てイエスの権威について質問し、イエスに言いがかりをつけてきました。

それにはイエスは直接には答えず、反対に彼らに二つのたとえによって、神に対する彼らの不信仰、不従順、反逆を明らかになさり、またやはり神の怒りとさばきを明らかになさいました。

それはまず、ぶどう園に「行きます、お父さん」と言いながら行かなかった息子のたとえでした。

続けて、ぶどう園の主人が遣わした多くのしもべたちを虐待し、ついには主人の息子をも殺してしまった農夫たちのたとえでした。

そして「ですから、わたしは言うておきます。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ民に与えられます。」(21:43)とイエスは彼らに宣告なさいました。

そういう前二つのたとえに続けて、「再び」「たとえ」をもってイエスは彼らにお答えになるのです。

22:2 「天の御国は、自分の息子のために、結婚の披露宴を催した王にたとえることができます。

22:3 王は披露宴に招待した客を呼びにしもべたちを遣わしたが、彼らは来ようとしなかった。

22:4 それで再び、次のように言って別のしもべたちを遣わした。『招待した客にこう言いなさい。「私は食事を用意しました。私の雄牛や肥えた家畜を屠り、何もかも整いました。どうぞ披露宴においでください」と。』

22:5 ところが彼らは気にもかけず、ある者は自分の畑に、別の者は自分の商売に出て行き、

22:6 残りの者たちは、王のしもべたちを捕まえて侮辱し、殺してしまった。

22:7 王は怒って軍隊を送り、その人殺しどもを滅ぼして、彼らの町を焼き払った。

「王」は天の父なる神のこと、「自分の息子」はイエス・キリストのこと、「客」はこのたとえを聞かされているユダヤ人の祭司長たち、パリサイ人たち、民の長老たちのことでした（更には周りにいたユダヤ人群衆も含まれていたとも考えられます）。

王の息子の「結婚の披露宴」とは、ここではイエス・キリスト（神の約束のメシヤ）がついにこの地上に来られたという、「この民全体に与えられる、大きな喜び」（ルカ 2:10）の出来事を表していると言えるでしょう。

そしてそのイエス・キリストによって、イエス・キリストを通して、イエス・キリストとともに民が神の御支配（御国）を受ける、大きな喜びのときとも言えるでしょう。

それは、神がご自身の栄光のために、神の民のために、民の救いのために、長らく約束して来られた救い主キリストとしてご自分の御子イエスをお遣わしになる神の喜びの出来事でした。

それはまた、その父なる神に完全にお従いになり、人となられてこの地上に来られた御子イエス・キリストにとっても喜びでした。

そういう神の喜びにともに与るように、イエス・キリストとともに神の善き御支配のうちを歩む喜びへと神はまずユダヤ人たちを神の民として招いて来られたのでした。

旧約聖書の時代には律法によってキリスト・イエスを指し示し、神の約束を信じて神に

信頼してキリストを待ち望んで生きるように招いて来られたのでした。

そうやって、始めから終わりまで神が全てを「用意し」「何もかも整」えて来られたのです。

そして「時が満ちて」(ガラテヤ 4:4)、神の約束通り、御子イエスが父なる神にお従いになって、この地上に来て下さいました。

その神の子イエス・キリストに信頼して、イエス・キリストを通して神のもとに立ち返り、イエス・キリストとともに神の善き支配を喜んで感謝して受けなさいという幸いな招きが、王の「しもべたち」の派遣と呼びかけによる招きにたとえられたのです。

初めに遣わしたしもべたちの呼びかけを「客」が無視して「来ようとしなかった」としても王は「再び」「別のしもべたちを遣わし」、「私は食事を用意しました。私の雄牛や肥えた家畜を屠り、何もかも整いました。どうぞ披露宴においでください」と言ってなおも招きを続けました。

それは王の深いあわれみであり、忍耐であり、へりくだりでした(あのぶどう園の主人も同じでした)。

「披露宴」の、「客」の必要の全ては王の方で用意し、整えていました。

前々から「招待」されていた「客」は、ただ喜んでその「披露宴」の中に入って行けばよかったです。

しかし彼らは「しもべたち」による「王」の招きを「気にもかけず(軽んじ、ないがしろにし、顧みず)」、「ある者は自分の畑に、別の者は自分の商売に出て行き」ました。

彼らは「自分の」都合(仕事、利益)を、神の招きに従うことよりも大事としたのです。

「神のことを思わないで、人のことを思」(16:23)いました。

彼らは神の招きではなくサタンの招きに従ったのです。

また、「残りの者たちは、王のしもべたちを捕まえて侮辱し、殺してしま」いました(あのぶどう園の農夫たちも同じでした)。

これら「王のしもべたち」に対する態度はそのまま「王」と王の「息子」に対する態度でした。

こうやって彼らは、神が差し出してくださった「神の御支配」「神の恵み・あわれみ」—それは即ちイエス・キリストご自身であり、キリストの義とも言えます—を拒絶したのです。

神の国と神の義を第一とはしないで自分の肉の思いを第一とする。神の支配、恵み、あわれみ、義など自分には関係ない、必要ない、大きなお世話だ、そんなものはお断りだ、自分にはそれよりもっと大事なこと—仕事だったり、律法の行いだったり—がある、それで自分は大丈夫だ、それで充分生きて行ける、そんなふうに彼らは思い上がっていました。

それは彼らの最善を考え、彼らに最高・究極のあわれみ・恵み・忍耐をお示しになって来た「王」なる神とその子イエス・キリストに対する不信仰、忘恩、反逆、おごり高ぶりの罪以外の何物でもありませんでした。

そういう罪を罪として必ず正しく審判なさる義であり聖なる神を、「怒って軍隊を送り、その人殺しどもを滅ぼして、彼らの町を焼き払った」「王」にイエスはたとえられたのです(ぶどう園の主人が悪い農夫たちを情け容赦なく滅ぼすのと同じように)。

ではこうして披露宴に来る客はいなくなってしまったのか、そうではありません。

王は始めに招待した客以外の人々を招待するのです。

22:8 それから王はしもべたちに言った。『披露宴の用意はできているが、招待した人たちはふさわしくなかった。

22:9 だから大通りに行って、出会った人をみな披露宴に招きなさい。』

22:10 しもべたちは通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った人をみな集めたので、披露宴は客でいっぱいになった。

ぶどう園のたとえで言えば、「別の農夫たちに貸す」(41)ということです。

後に使徒パウロとバルナバがユダヤ人たちに向かって、「神のことは、まずあなたがたに語られなければなりません。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者にしています。ですから、見なさい、私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。」と大胆に語りました(使徒 13:46)。

「招待した人たちはふさわしくなかった」とはこういうことでした。

ユダヤ人はイエス・キリストを拒んで、自分から神の招きを拒み、神の御支配を受けることを拒んだ、神の御支配を受けるのにふさわしくない者にしていたということです。

神の失敗、責任ではなく、自分たち自身のつまずき、責任でした。

こうして「披露宴は客でいっぱいにな」り、先のイエスのみことばで言えば「神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ民に与えられます」(43)ということになりました。

こうして「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ないのです。」(22:14)となれば話はスムーズにつながるように思います。

しかし、イエスはここで更に関連した「たとえ」をお語りになりました(1節の「たとえ」が複数形なのはそれだからかもしれません)。

22:11 王が客たちを見ようとして入って来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない人が一人いた。

22:12 王はその人に言った。『友よ。どうして婚礼の礼服を着ないで、ここに入って来たのか。』しかし、彼は黙っていた。

22:13 そこで、王は召使いたちに言った。『この男の手足を縛って、外の暗闇に放り出せ。この男はそこで泣いて歯ぎしりすることになる。』

22:14 招かれる人は多いが、選ばれる人は少ないのです。」

最初に招待された人々は、そもそも招待を無視したり、招待した王(のしもべたち)を侮辱して殺したことで、自分自身を「ふさわしくなかった」者にしたのです。

しかし後から招待されて披露宴に来た客の中にも、なおも「ふさわしくなかった」者がいたということです。

それは「婚礼の礼服を着ていない人」でした。

この「礼服」とは、王宮の宴会の席で、王の前で着る服は客が自分で用意するのではなく、王が用意し与えてくれる「礼服」でした。

ですから、この「**礼服を着ていない人**」は、王が着るように指定した「**礼服**」を着ることを拒んだ人だったのです。

彼は形の上では王の招きに従って披露宴に着たのですが、「自分は自分の持ち合わせの服で王の宴会に出、王の前、王の息子の前に出るのだ」と言い張って、王が用意し指定した「**礼服**」を拒んだのです。

そうやって彼は、あの招きを始めから無視したり、しもべたちを捕まえ侮辱し殺してしまった最初の招待客たちと事実上同じ反抗、侮辱を王に対してしたことになったのです。

王と王の息子の喜びの宴会にふさわしい「**礼服**」は王が用意して着せてくださる、王の側でしか用意できない物なのですから、その用意された「**礼服**」を感謝し喜んで着るべきだったのです。

しかし故意にそれを拒んだのですから、やはり彼も自分自身をふさわしくない者にしてしまったのです。

この「**礼服**」によってたとえられたことは何か？

イエス・キリストによって、イエス・キリストを通して、イエス・キリストとともに民が神の御支配（御国）を受けるべく、感謝と喜びをもって受けて着るべき「**礼服**」とは何でしょうか？

それはイエス・キリストご自身であり、イエス・キリストの義、即ち神の義です（それしかあり得ません）。

使徒パウロは言います。

「キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのです。ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」（ガラテヤ 3:27-28）

「その教えとは、あなたがたの以前の生活について言えば、人を欺く情欲によって腐敗していく古い人を、あなたがたが脱ぎ捨てること、また、あなたがたが霊と心において新しくされ続け、真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ること」（エペソ 4:22-24）

旧約の預言者イザヤも「私は**主**にあって大いに楽しみ、私のたましいも私の神にあって喜ぶ。主が私に救いの衣を着せ、正義の外套をまとわせ、花婿のように栄冠をかぶらせ、花嫁のように宝玉で飾ってくださるからだ。」（イザヤ 61:10）と言っています。

ゼカリヤ書には汚れた服を着て主の使いの前に立っていた大祭司ヨシュアについて御使いが「彼の汚れた服を脱がせよ」と言い、「見よ、わたしはあなたの咎を除いた。あなたに**礼服**を着せよう。」と言う場面があります（ゼカリヤ 3:3-4）

イエスはもちろんそういうことも知って、ここでご自分とご自分の義を「**礼服**」にたとえられたに違いありません。

こうして神（王）が用意し差し出したイエス・キリスト（「**礼服**」）を着ることを拒んで自分が用意したそれなり自分流の**礼服**で王と王の息子の前に出ようとした傲慢な自身家は、神（王）によって「**外の暗闇に放り出**」されることになるのです。

異邦人であってもユダヤ人であっても、「**選ばれる人**」は必ず神による招待を自分へのあわれみ恵みの招きだと感謝と喜びをもって受け入れ、何を差し置いても「まず神の国と神の義」を、イエス・キリストを求め、感謝と喜びをもって信頼し、イエス・キリストに

よる神の御支配（神の国）を受けて生きるのです。

この罪の世ではたとえ、いや必ず「少ない」のですが、その人は必ずそうやって王なる神に、主イエス・キリストに従って歩むのです。